

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十卷 第六號

大正十一年十二月一日發行

論叢

相續税に於ける特殊累進に就きて

法學博士 神戸 正雄

勞農露國の農業

法學博士 河田 嗣郎

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず

法學博士 田島 錦治

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

資料

中央市場論并に食料品配給費研究

法學博士 戸田 海市

說苑

リストと歴史派經濟學

法學士 山口 正太郎

我國の都市及地方に於ける婚姻の統計的觀察

經濟學士 岡崎 文規

雜錄

無責任なる翻譯の一例

法學博士 河上 肇

原田學士譯ボーリユー經濟學原論

經濟學士 小川 福太郎

價格指數に就て

法學士 沙見 三郎

附錄
本誌第十五卷總目錄

經濟道と經濟術 (七・完)

作 田 莊 一

六 經 濟 道 德

其四 最高級の經濟道德

第二の道德階段に於て繁昌する經濟生活も第三階段に入りては順に勢を失つて凋落するが、第四の最高階段に達するときは初めて安全堅固なる地盤を與へられて復活し來り、而かも第二段の如き爛熟の末路に陥ることなく着實に無窮の平路を進み得るのである。最高の道德階段に立つて經濟生活を營むことは常人にとつて極めて困難なる業であるが、我等の理想は其處に在り、又向上的精神が高調に達せるときは斷片的には此種の經濟行爲に出づる場合も決して稀有でない。

經濟道德と雖も最高級に立つ以上は全我性、統我性、覺動力及び造化觀の四者を具備することは勿論であるが、特に經濟道德として問題となるは經濟生活に於ける志向である。從來の通説は此生活に於ける志向を幸福觀及び功利主義となすが、吾人は之を全然不可なりとして一概に貶する譯ではない。併し幸福觀を執るは外物中の外物たる有形財を對象とする經濟生活にあつても低級の道德たるを免れない。有形財を内心より隔離して二者を對立せしめず、又之を排斥しながら

尙ほ内心に相對する存在と見ることもなく、内心の發露が直に生産となり消費となり需要となり供給となる造化觀に立つに至りて初めて經濟生活の極致に達する。古代は勿論、今日の營利經濟時代に於ても小農又は小工の中に自我實現の態度を以て經濟行爲に出づるものがあり、又營利企業の眞中に立ちて事業其ものを樂しむ一徹專念の企業家もある。幸福觀及び功利主義を以て總ての人の經濟生活を律し得ると思はず、其は甚しき誤解謬見たるを免れない。但だ世を擧げて功利を渴仰する時、少數の人々が功利を無視して行動するならば、恐くは其人々の經濟生活は共に蹣らざるの故を以て痛く壓迫せらるゝであらう。併し此の場合に於て高級道德を持する人々を濟ふは後に於て述ぶる如き社會の立場に於ける經濟道の任務であつて、箇人としては苦境に陷るの故を以て高き道德階段より下るべきでなく、又道心堅き者は下らふともしないのである。

造化觀の經濟生活は人格の成長の中に富を成し行くに止まり富其ものを標的として努力するのではないから、速かに富を増殖する點に於ては到底幸福觀に及ばない。其は箇人に於けると同じく社會に就て云ふも亦然り。されど其故を以て經濟上、幸福觀を掲げて造化觀を抑ふるは當らない。蓋し造化觀に比すれば、功利的勞働は苦痛甚しく速かに勞働能力を衰退せしめ、功利的企業は富の増殖に急しくして其結果は過度又は有害なる富の消費を誘致し且つ富の淵源を涸渇せしめ、孰れも長期より見たる經濟生活の發展を阻害する。更に幸福觀の經濟生活が爛熟するときは必ず生

活全體を腐敗せしめ、殊に此の志向が主我性に基くときは今日見る所の世相の如く多數の人々は却つて不幸の境遇に陥り原始的志向に逆退して單なる生存を希求するやうな境涯に立ち到るのである。

次に又、修養や教育の如きは可なりとするも經濟生活までが造化觀に由るをせば、幸福觀に見るが如き功利主義は行はれないで一切の利害得失を無視し、只管に創造心の向ふがまゝに不合理的に生産し消費し需要し供給することとなり、斯くては生存を保持し文化を促進する爲に有效なる財物の利用は出来なくなり謂ゆる不經濟なる行動が經濟生活の秩序を失はしむるであらふと云ふ疑ひも起り得る。普通道德に於ける幸福觀及び功利主義が低級の道德たることは廣く認められて居るから、此に不満を感じる人々は經濟生活に於ても其の適用を拒まふとする。併し同時に又功利主義を抜き去つた後の經濟生活が果して可能であらふか、少くとも其にて經濟生活の進展が期待せらるゝであらふか、其處に幾分の疑點が存する。此の疑問を解くことは造化觀の經濟道德にとつては甚だ重要な意義を有する。

幸福觀に於ける功利主義は先きに述べたる如く、代償として失ふ所の利益と收果として得る所の利益とを比較し超過利益又は剩餘利益ありと認めたるとき始めて行爲に出で、其の加はれる利益に由りて欲我の擴充を計るのである。然るに造化觀にありては自我其もの若くは人格が外物を

攝取する所の内的成長に志ざすのであるから、行爲を決執するに當りても利害得失を考慮打算するのでなく、無條件に目的を立て只管に其の達成に努むるのである。斯の如く利益取捨の功利的態度と反對の地位にある行爲の態度に就ては未だ適當なる名稱を見當らないから、今假りに功利主義に對し之を期成主義と名づけて置きたい。幸福觀は必ず代償對收果の關係を考慮して相對的比較的に價值實現を計る功利主義に據るが、造化觀は全く此の關係を超越して一向專念の態度を執り絶對的無比的に價值實現に力むる期成主義に據る。我等は數々事の成敗は念頭に置かぬなど云ふが、其は成敗の豫見し難き場合にも精神内部の要求に由つて斷行するとか、又は當面の仕事は失敗しても其より何か望ましき後續結果を生ずるを豫期するとか云ふまでにて、初めより凡てが必然の失敗に終ることを自ら豫期し、其で満足すると思ひながら或行爲に出づることはあり得ない。或行爲が功利的でなく期成的であると云ふのは、打算上、利益を効たすと云ふ點から決心するのでなく、無條件に思ひ立つた事の成就を期すると云ふ意味である。

期成主義は只管に目的の成就に心懸ける。従つて目的の達成をなるべく完全ならしめんとすることは功利主義と同様であり、寧ろより徹底的である。然らば目的を達する手段に就てはどうであるか。期成主義は無條件に目的を立て只管に之が達成に力むるのであるから其の手段を執るに當つても盲目的に不合理的に妄動するかと云ふに決して然うでなく、目的達成の爲めにはなるべ

く最良の手段に依るべく慎重なる考慮を廻らすのである。此點も亦功利主義と同様であり、寧ろより以上であつて、未合理的なる生存觀や、合理や不合理やに拘らざる安立觀と趣を異にする。唯だ功利主義にありては手段としての代償と目的としての收果を比較するから其點より出發して、なるべく前者即ち失はるる利益を小ならしめ後者即ち得らるる利益を大ならしめんとするが、期成主義にあつては目的と手段との比較をなさないから、目的に就てはなるべく之を完全に遂げんとし、手段に就てはなるべく之を節度に合はんとする。蓋し目的の完全なる遂達を期するは一切の志向に通じて當然自明のことであり、手段を節度に合はんとする所以は及ばざる手段を以てしては目的を達すること難く過ぎたる手段を浪費すれば其死用が他の活用を妨ぐるからである。斯の如く目的と手段との關係でなく、目的並に手段に對する心懸に至つては、唯だ出發點と態様とを異にするのみにて趣旨に於ては功利主義も期成主義も其の軌を一にする。而して斯く無駄をせずに効果を擧ぐると云ふ行爲の規範は是まで經濟主義又は合理主義と呼ばれるが、其は經濟に限らるる譯でもなく、又其のみが合理的である譯でもないから此等の名稱は穩當でない。

吾人が禮僧の生活振りを見ると一粒の米も一片の反古も決して粗末に扱はないで極度に其の效能を發揮せしむるやうに用ひて居る。高僧になるだけ其が嚴重にて自由財物たる水すらも所要の限度を越へては一杓をも用ゐ過ぎない。財物を人より受くるも人に與ふるも決して之を濫りにしない。余は洪川和尚の許にて修業したる人から次の話を聞いた。或人、和尚が釣錢として差出したる一錢銅貨を辭退して其には及ばぬと云つたとき、和尚は此を呉れるのかと云つて如何にも有難さうに感謝して

頂戴したてである。一杓の水や一錢の銅貨をも尊重する所を見ると赤裸々なる謂ゆる經濟主義は、最も鋭敏なる營利心を競はしむる取引所の内に横溢すると思ひの外、却つて致富心を最も甚しく輕んずる禪寺の内に活躍して居る。

無駄をせずに効果を擧ぐると云ふことは功利主義も期成主義も同様であり、否な寧ろ此の二主義より引離れて自立する所の別の主義と見て差支ない。功利の徒は閑地税や奢侈税の負擔を甘しとするほどに無駄をすることもある。功利主義に由らず期成主義に由ることが決して財物の有效なる利用を妨ぐる譯でなく寧ろ前者よりも一層忠實に謂ゆる經濟主義を遵守するところへ言ひ得らるゝ。従つて經濟道の問題としては本質上の功利主義と期成主義と孰れが高級なりやと云ふ點にある。功利主義は秤器を手にして只だ剩餘利益を求め、利あらば進み利なければ止まり、手段を案じて目的を定むると云ふ點に就て目的と手段とを一貫せる規範を立つるのである。而して此の剩餘利益をなるべく大ならしめんが爲めには收果を大ならしめ代價を小ならしめんとするが、これ亦經濟の道であつて術でなく、只だ附隨的第二次的の道たるに止まつて功利主義の本質をなすものではない。然るに期成主義となれば、手段たる負擔と較量せずして目的を決定し目的を定めて手段を制すると云ふ點に於て目的と手段とを連結する規範を立つるのである。而して此主義は一方には目的の完成に着眼しながら、同時に他方には人格の發出たる限りなき創造に對し明かに限りある手段を用うるからには、只だ其の節度を守ることが幾多の目的を達する所以なること

を考慮するが、此の手段を節して効果を擧ぐると云ふことは、やはり一の經濟の道なれど附隨的第二次的なるに止まり、期成主義の本質をなすものでない。殊に又幸福觀には所有欲を伴ふも造化觀は之を超脱する。従つて此にあつては一切の財物は社會の公財であり一切の自然物は天與の恩恵であると思ふから私に之を濫用浪費する筈はない。脱俗の高士が俗人の眼に吝嗇と誤解さるゝほど節約を敢てするは毫も怪しむに足らないのである。要するに經濟生活にありても造化觀及び期成主義は幸福觀及び功利主義と異れる最高級の道徳であつて、又無駄をせず其に効果を擧ぐると云ふ點に於ても功利主義に優るとも劣ることなく、謂ゆる不經濟の誹りを受ける筈はない。多くの人、殊に先きに「經濟と技術」の項に引用したる「リーフマン」の如きが、是を經濟の本則であると云ふ所の目的と手段との比較秤量は、吾人の見る所にては是こそ單純に功利主義と呼ばるべきものにて、經濟生活の道は其以外にも、否其にも優さりて他に存することを疑はないのである。

以上述べたる造化觀の期成主義に就ては次の如き反對説が起るかも知れぬ。即ち期成主義にては目的と手段との價值を比較せぬと云ふが、只管に成就を期する所以は目的の價值が常に手段の價值に超ゆると當人が見るからであつて、其は功利主義の限定された場合に過ぎない。若し吾人が貨幣評價に限らず如何なる標準を以てする評價に由つても、より大なる價值の實現を見ないと思ふならば、吾人の理性は決して斯かる價值實現の行爲を許さないであらふ。然り、期成主義は常に目的の價值が手段の價值に優ると思ふが故に行爲に出づると言つても可い。只だ功利主義に於ける目的の決定が相對的であつて、目的價

値が手段價值に勝ると判定することが決心の原因となると異り、期成主義にありては目的の決定に際し手段と相談しないと言ふ意味にて絶對的であり、其に要する手段の價值は初めから目的の價值に劣ることが決つて居るのであり、又斯く言ひ得るはごに目的が初めから率直に決定せらるゝのである。又此主義に於て二以上の目的が並存し其の選擇を要するときは、是等を目的として取扱はないで是等を包容する高き目的を達する二以上の手段と認めて選擇を爲し、飽くまでも目的と手段とを比較することはない、若し究竟的と思はるゝ目的が二以上存するならば、其處では目的の選擇は問題でなく、退いて人格若くは自我其ものゝ安立に深甚の思ひを致さなければならぬ苦である。

以上吾人は經濟道德の四階段に就て大要を述べたるが、要するに我等が經濟生活に於て準由する所の道は、一には直に普遍道德より來り、二には其の下に於て經濟に特殊なる道德之に加はり二者合體して一切の經濟行爲を指導するのである。されば如何なる經濟行爲と雖も一として道德の埒外に逸することなく、又道德的意義を有しない經濟行爲は一も存しない譯である。唯だ問題は或經濟行爲が如何なる道德階段に立つか、從つて其はどれだけ高き道德的價值を有するかと云ふにあるのみ。

吾人の理想は普遍道德の最高階段に立つて經濟生活を營むにある。經濟生活は決して幸福觀及び功利主義に止まるものでない。營利の觀念を以て經濟の要素とする見解の謬れることは勿論として、貨幣を中心概念として經濟を特色付くる學說も吾人の賛同せざる所である。貨幣の概念を如

何に廣むるとしても其は畢竟するに功利主義經濟に役立つ價値の秤器に過ぎない。飢餓に迫つて生存權を主張する場合にも、我等の家庭内にも將た特志者の企つる共產村の内にも、必ず經濟生活は存するが貨幣的評價を必要としない。斯く云ふも吾人は決して貨幣を中心とする經濟生活を目して不道德となすのではない。主我的妥協主義も貨幣秤量の功利主義も時代的には皆な人類文明の一精華であり、又我等が必然に迫るべき經濟道德の一階段である。但だ此の階段では經濟生活のみに就て云ふも、其の立てる基礎が甚だ不安定であり、其の前途が必然に行き詰まるべき運命にある。更に生活全體に就て考ふれば、經濟生活に於て餘りに旺盛なる唯物觀や功利主義が他の生活部面にも浸潤して生活全體が唯物的功利的に化し行く傾向が見ゆる。此の傾向は經濟生活に於ける勞苦が甚しくなればなるだけ著しく現はれて来る。而して互動的に社會に於ける唯物的功利的傾向が旺盛になればなるだけ鬭爭の機會を多からしめて、富めるも貧しきも夫々の立場に於て一層甚しく勞苦を感じ、其が又箇人の全精神の中に唯物觀や功利主義を培養して行く。我等は餘りに甚しく右傾しつゝある。然るに我等の本然の進路は偏向を許さない。是に於てか生活全體の苦悶から現代の經濟生活に反對する二派の思想及び運動を生じ來つた。其一是右傾の道を元に引返へして生存權を主張する勞働者運動であり、其二是右傾に反抗して急に左傾し沒我的唯心觀を主張する宗教者運動である。是等は共に現代の黃金色に對しながら、一は之を赤化せんと

し、他は之を黒化せんとする。道德的に見たる赤化は恐怖や危険を示す赤色ではなく、強く生きんとする赤子の昂奮せる血色であり、又其は今の功利經濟に對して左傾するのではなく、正直はすのである。今の幸福道に對する眞の左傾は寧ろ墨染の思想に宿つて居る。道德の進化を正視する者にとつては此の赤化は恐るべきでなく寧ろ文明人としては耻づべきことであり、又此の黒化は必然の進路として避くべからざることであるが、經濟生活に就て言へば吾人は斯かる反動的相對的の中間階段に歩を止めてはならぬ。吾人は最後の階段として經濟生活に於ても亦造化觀及び期成主義を志向とする第四王國の出現を期待するのである。

經濟道德の説明を終るに當つて社會經濟道に就て數言を付加へたい。上に述べたる經濟道德は主として個人の立場より見たる經濟生活の道であるが、更に個人の集合たる社會の立場より見たる經濟交通の道を攻究する必要がある。從來の倫理學は概ね人格者、就中個人の立場に於ける生活の規範を研究するものであるが、近頃唱へらるゝ社會倫理學 Social Ethics に於ては社會問題の解決や社會政策の樹立に就て根本的研究を試みんとする情勢が看取さるゝ。従つて經濟道の研究も個人又は人格者の立場に於ける生活の道の外に、社會又は人格者聯合の立場に於ける交通の道をも見なければならぬ。經濟學の原則の多くは此の後者の中に存する。併し今此問題に立入る

ことはこの小篇にとつては餘りに廣汎に過ぐると思はるゝから、是處では簡單に經濟交通の道が問題として如何に取扱はるゝかを略説するに止めたい。

社會は人格者就中個人の交通關係を内容とする組織體なることは何人も疑はない。されど其が單に關係に止まるか、進んで生活心意を具有する一體の人格者と成つて居るかに就ては爭議百出を免れない。社會が單なる交通關係であるとしても其關係を支持する統制力が實在することは否認され得ない。其が「見えざる手」であつても「聞こゆる號令」であつても統制力たるに變りはない。唯だ其の統制力が組成單位たる個體を結合して一の組織體たらしむる以上に、進んで其が社會をして一體の生活主體として自己の生活を營ましむる所の心意力と成つて居るかどうかが問題である。凡そ有機體若しくは組織體には未完組織のものと完成組織のものの二種あるが、未完組織體にあつては有機體の在內的統一力は組織を完成せんとする力として働きまだ生活上の統一を司ぐる人格としての心意力に達しない。生活上の心意は寧ろ組織體の構成單位たる箇體の方に存する。之と異り完成組織體にありては統一心意は組織體其ものゝ生活を營む力として働き、組織に就ては唯だ完成狀態を持續し組織型に従つて機能を成長せしむるに止まる。従つて構成單位には各別獨自の生活意志は存しない。將來に於ける發達如何は暫らく措いて、現在の狀態に就て言へば、國民社會と雖も一の未完組織體であつて、交通上の統一心意を有するも生活上の其を

有せず、たとへ生活意志の實在を認むるとしても其は尙ほ潜在的無意識的であると見て、一先づ其處に歩を止めて置く方が安全である。唯だ箇人にして社會を以て自己とする全我性に到達せる者は自己即ち社會と思念し自己の生活が即ち社會其ものゝ生活となり、其人にとつては社會其ものゝ生活の道が嚴存する。斯かる人々が社會の中堅階級となつて他の箇人生活主義の人々を統治するならば、其時初めて社會は人格者たり生活主體たる第一步に入り、潜在的無意識的生活心意が次第に顯現的意識的になつて來るのである。

社會を人格者であり生活主體であると見るときは、社會の立場に於ける經濟道は恰も箇人の立場に於けると同様に社會其ものゝ經濟生活に於て何を爲すかの規範として定立せらるゝ。又社會を未完組織の交通關係と見るときは、社會の立場に於ける經濟道は生活上の規範でなく交通上の組織及び運營として何を爲すかの規範となる。此の經濟道は箇人生活主義に基き箇人の經濟生活を保障し進展せしむる基礎及び條件たる所の道である。英國流の箇人主義經濟學説は極めて廣き箇人自由を許す所の交通上の社會經濟道であるが、廣き箇人自由と云ふことは必ずしも箇人生活主義の特色ではない。權力的共產制の如く箇人自由を極端に狹め社會統制力を以て細かに箇人の經濟生活を律する場合に於ても、其統制が箇人の經濟生活の爲めに好良なる基礎及び條件を與ふるものとなす限りは、依然として一の箇人生活主義たるに止まり、其社會經濟道は交通上の組織

及び運營の道であつて社會其ものゝ生活上の道ではない。之と異り、箇人生活主義を超越して自己即ち社會なりて思念する者の考ふる社會經濟道は、もはや箇人の經濟生活の基礎及び條件でなく、正しく箇人の立場より見たる經濟道と形態を同ふし、然かも箇人より社會に成長せる大人格者の生活の道となるのである。是に至りては箇人自由の問題は已に脚下に埋沒されて何の意味も存しない。但だ斯かる經濟道を立つる人があつても其が社會の中堅とならざる間は其の道を社會に實現せしむることは出来ない。資本企業制や自由交通制が功成り名遂げて隱退し、勞働企業制や統整交通制が之に代つて經濟組織の中樞となるであらふと言ふことは、經濟組織の變遷を知る者にとつては割合に了解し易い未來記と考へらるゝ。されど今日まで極めて長い間、權勢を振つて居る箇人生活主義が全我性を基礎とする社會生活主義に潔よく其地位を譲る日の果して何時到來するであらふかは容易に之を逆睹し得ない。しかし道が現に行はるゝと否とは道としての價值を毫も減する所以でない。吾人は生活上の社會經濟道に就ても其の存在の理由を認めて其處に思を致さなければならぬ。但だ現實の社會に面して研究の途を進むるに當りては、先づ交通上の組織及び運營の經濟道を標的とするのが順序である。而して其の意味の社會の立場より見るも社會經濟道の基調となるものは言ふまでもなく箇人の立場より見たる生活上の經濟道である。經濟生活は道德生活であるとする所の經濟道の考察は、やがて是まで道德學と並立する如く裝へる社會經

濟學に對して可なり廣汎なる修正を要求することゝなるであらふ。

八 經濟道と經濟術

經濟道には上述の如く生活上の箇人の道と交通上の社會の道との別があるが、更に見地を變ふれば人の自然界に對する生産及び消費の道と人と人との關係たる需要及び供給の道との別も存する。是等を通じて經濟道の特色とする所は經濟行爲に於て我等は何を爲すを可とするかを指示する所の趣旨としての行爲の規範たる點にある。而して如上の經濟道には其々の經濟術が隨伴し、其の特色は經濟道を實現するに就て如何に爲すを可とするかを指示する所の方法としての行爲の規範たる點に在る。是等の趣旨規範と方法規範とが合して始めて一の行爲が完全に指導せらるる。或經濟行爲と其の前提又は準備となる他の經濟行爲とは謂ゆる目的及び手段の關係はあつても經濟道及び經濟術の關係とはならぬ。又一の經濟行爲に二以上の規範が含まれることがあつても、其が並立する二以上の趣旨ならば經濟道のみとなり、方法ならば經濟術のみとなる。經濟道と經濟術とは共に一の行爲の中に包まるゝも必ず行爲の趣旨と之を遂達する方法との關係に立つのである。二者の對照は恰も一の美象製作に於て表現さるゝ内容と表現する技巧との關係の如きである。

余は是まで經濟道德と經濟道とを混同し唯だ語路のよいやうに用ゐて來た。尤も其爲めに論旨を誤つては居ないが今經濟術

と對照するに當つて一言其點に就て付説したい。是までは普通の用例に従つて道德及び技術の語を對立せしめて來たが、嚴密に言へば其は穩當でない。道德の語は志道と徳性との合稱である。志道は行爲の趣旨規範其のものであり、徳性は之を決執する品性の力である。而して道德に對立するものは藝術であつて其は技術と藝能との合稱である。技術は行爲の方法規範其のものであり、藝能は之を具現する才能の力である。道と徳と及び術と藝とは相伴ふ筈であるが、而かも又道を知らざる之を行ふ徳を缺き、術を知らざる之を施さず藝に熟ぜざる場合もあり得る。其々の二つは一々に離れて獨立することは出来ないが強い特色によりて區別すれば次のやうになる。道と術とは智識を主たる内容となし、研究によりて求得せられ、徳は品性を、藝は才能を主たる内容となし鍛練習熟によりて求得せらる。道と術とは比較上授受し易いが、徳と藝とは強く自己に固着して離れ難い。斯くて吾人の研究の對象となるものは道と術とであつて、徳性と藝能とは道と術とを知らず共に其々に従つて鍛練習熟の功を積むを要する。或道や術は知り易きも之に伴ふ徳や藝は養ひ難きこともあり、又は其の逆であることもあるが、孰れにしても道は徳を須ち術は藝を須つて其々完成する。但だ徳性と藝能とは實行の上に具現する外はないが、道と術とは我等は何を爲し如何に爲すを可とするかと思ふ智識の方面より人々の間に論議の問題となり得る。而して精確にして體系を具ふる道の智識が道學であり、同様な術の智識が術學である。斯くて吾人は經濟生活を解くに當りても經濟行爲に含まるゝ徳性と藝能とは夫々志道と技術とに隨伴するものと見て之を除外し、専ら經濟生活の道と術とに於ける行爲の規範に就て論議するのである。

經濟道は一般生活上の普通の道より來るものと經濟生活に特殊なる道との合體であることは先きに述べたる通りであるが、經濟術も亦同様の内容を有する。例へば作文や計算の如き普通の術に商業上の特殊の術を加へて商業作文や商業計算の術が成立つが如し。而して又商業や經濟行政に見るが如き交通經濟の術に比すれば農業、工業、通運業の如き利用經濟の生産術には特殊の技

術が遙かに細かに且つ多様に存するのである。

生産術を取扱ふ人々は特殊の技術を以て立つだけ其れだけ細かい専門家なるから各部局の専門家を統ぶる融通性に乏しい其點が技術者は技術者として終り上司の地位に立つことが稀なる所以である。之に對しては近頃技術者の側から謂ゆる法科萬能の風を打破し技術者の地位向上を計らんとする運動が起つて居る。吾人の見る所にては何の事業であつても樞要の地位は必ず其道の體持者に與ふべく、術の熟練者は其下に就くのが當然であると思ふ。上司は器を見る明あらば事足り必ずしも器であることを要しない。されど是まで世間の風を見るに技術者と云へば機械的技術者のみを指し、其外に社會的技術者あるを知らざる傾向がある。謂ゆる時務練達の士と言はるゝ者の中にも寧ろ事務練達の士とも言ふべく、畢竟、一の社會的技術者に外ならない者も少くない。事務家が上司として適任ならざるは機械的技術者と殆ど擇ぶ所はない。但だ前者が後者は細かい特殊技術の上に立たないだけ種々の仕事に亘つて融通性が多いから、外見上各部局の専門家の上に立つに適するかの如く見ゆるのである。而かも其の融通性に富むと云ふことは他方に於ては社會的技術が幼稚であつて何んでも出来るが何んでも良く出来ないといふことを反證して居る。我國に於ける高級事務官吏の部局間の轉任を見ると如上の傾向があるらしく見える。若し實際の狀態が、技術に熟達せる機械的技術者は其が故に終生、技術者として置かれ、技術に通曉せざる社會的技術者は其が故に道を決定する上司の地位に上り得る有様であるならば、機械的技術者の憤慨するのも當然である。要するに道を決定すると術を施用するとは別の仕事であり、人の性能によりても長所短所があるから、各人の長所に從つて得意の地位を占むればよい。同時に又、何人であれ、道を定むる力ある以上は其々専門の技術者の中から上司を出すのが當然である。

以上述べたる所を要約すれば我等の經濟生活に於ける一切の行爲は第一に經濟道によりて規定せられ、第二に其を實現せしむる經濟術によりて規定せられ、二者相合して經濟行爲に完全なる規範を與ふる。從來の諸説は、一方では經濟と技術とを對立せしめ、他方では道德と經濟とを對

立せしめ、是等の別箇の二問題として取扱つて居る。然るに是等の説は技術も道德も共に經濟よりも全く別異なる概念として經濟と對立せしめながら、少しく細かに考へ及ぶに従つてやがて經濟技術と言ひ經濟道德と言はざるを得ざるに至り、初めに技術又は道德と對立せしめたる經濟の概念は殆ど支持し難き結果となる。又經濟に對する道德又は技術を普遍道德又は普遍技術に限るときはやゝ意味ある如きも、斯く見るときは經濟生活に於ける道德又は技術は全く普遍道德又は普遍技術の中に收容せられざるものとなり了るであらふ。吾人は經濟と技術並に道德と經濟とを各別に對立せしむる種々の見解を打捨て、全く論理的に道と術との概念を定めて之を經濟の中に取入れるのである。斯の如きは決して論理癖を喜ばすが爲めでなく、從來の混雜せる諸説を整理して經濟の研究に出来るだけ明確なる進路を示す上に於て必要であると信ずるからである。(完)